

小学生も違憲裁判提起

8月23日、県平和委員会主催の伊藤千尋氏講演会が水戸市の青少年会館で開催されました。全体で70人、土浦平和の会から9名、年金者組合土浦支部から3名が参加しました。

伊藤氏は朝日新聞入社後、サンパウロ、バルセロナ、ロサンゼルス各支局長を歴任しました。フリーランスとなった今でも多くの外国を訪問し、その知見を基にした著作も多い方です。

現在、コスタリカ平和の会の共同代表を務めています。

講演の主な点をまとめます。

①ヨーロッパは今や自然エネルギーに猛進。

日本の技術を生かした波力発電も行われている。アイスランドでは必要な電力のほとんどを地熱発電で賄っている。調べてみたら、日本でもかなり地熱発電が行われていることが分かった。ただし、電力化の効率が悪く、改善が必要だ。これができれば原発20基分の出力が可能となる。

②ドイツは終戦記念日

の5月8日を「民主主義の日」としている。発想と位置付けが日本とは根本的に異なっている。戦争を引き起こしたことに対する謝罪と個人補償も徹底していて、これまでに10兆円を支出している。

③コスタリカは軍事予算をすべて教育費に回した。次世代を育てることが国を平和に維持することだと信じてい

る。日本と同じように憲法が尊重されていて、生活の基本はすべて憲法に照らし合わせてどうかと判断される。小学生でも違憲裁判を提起できる。

④ベトナムはなぜ、アメリカとフランスに勝てたのか。誰のための戦争であったかということに尽きる。アメリカとフランスは国の名誉のため、ベトナムは自分自身と愛する祖国の独立と民族統一のためという明確な目標があったから頑張れた。

⑤安倍政治を変えるに

は、国会で野党が過半数を占めないなどと考える必要はない。

「社会を変える15%の法則」というのがある。世論の15%を「安倍はやめろ」の一点で組織できれば可能だ。

水戸駅南口に800人

8月23日、水戸駅南口デッキでは、各界から戦争法案に反対する人たちがそれぞれの思いをリレーで訴えました。憲法学者小林節さんも駆けつけました。

いま、我が家の周辺の蓮田は緑の大海原のようになり、真っ白な大輪の花が咲き誇っている。こんな真夏の風景が見られるときには、原爆や戦争に関連した報道が多くなる。

国が戦争に乗り出すとき、必ず国民をペテンにかけた。70年前に終結した太平洋戦争では、「日本は神の国」だと、「神風」が吹いて日本は勝つと信じさせ、子供たちに「神童」になれと焚きつけ、「特攻隊」に「志願」させた。戦争では部隊が凄惨な戦いの結果、全滅したのに「玉砕」などと美化し、有無を言わずに村中で葬式を出させた。遺族が涙を流すことなど許さなかった。

今、安倍首相は「国の平和と安全」と言いながら、海外で自衛隊を戦わせ、日本を米国の手足とさせようとしている。これは日本の平和と安全とは逆に、世界中から猜疑心と警戒感を持たれる存在となるに違いない。

リレー随想

テロの標的ともなる。その警備のために街中に検問が

真夏の思い



9.6集会

張り巡らされる社会となるだろう。政府に疑義を挟む「輩」を取締り、こうして独裁政治を

仕上げていく。

今、そのようなペテンを芽のうち全力を挙げて摘み取ってしまおう。今ならまだ間に合う。

(岡田 安正)